

ピアノの先生

つよい人。何があってもぶれない人。私が小学校から高校まで通ったピアノ教室の先生はそういう人だった。いつでもつよい。一番尊敬している人は?と聞かれたら、私は決まって彼女のことを答える。私に大事なことを教えてくれた、彼女のことを。

初めて先生に会ったのは、小学校1年生の秋。幼稚園の年長さんになる年に引っ越し、それまで続けていたピアノ教室をやめた私は、1年以上ぶりにピアノ教室に通うことになった。新しいピアノ教室の先生は、目が大きかったせいもあるが、見られるとなんだか力を感じた。目を合わせると練習を怠っていたことを見透かされている気がした。もっとも、演奏を聴くだけで彼女はそんなこととっくにわかっていたのだが。先生は、厳しかった。つまらない部分練習を1日に何十回もするように指示され、通して弾くのが好きだった私は、あまり言われた通りに練習しなかった。しかし、先生は、一週間に一度私の演奏を聴くだけで、それがわかってしまうのだった。怠けて、注意されて、怠けて、注意されて、を繰り返すうちに、幼いながらも私は、この人には勝てないと学んだのだろう。いつからか、それなりに、言われた通りの練習をするようになっていった。

小学校6年生の時、コンクールの全国大会まで出場した。私はそれで満足し、ピアノ教室をやめたいと両親に言った。両親は否定し、ピアノの先生と両親との連絡帳にそのことを書いた。先生は私に言った。「今まで大事にしてきたものを、簡単に捨ててはいけない。」と。私が教室をやめようとした主な理由は、友達と遊ぶ時間が欲しいという軽いものだった。さらに、「たった1回全国大会に出たくらい何も特別なことじゃない。まだ満足できる技術なんて何も持っていない。」と言われてしまった。ああ、その通り。何も言えなかった。この人にはかなわないな。でも、ちょっと、安心して、ちょっと嬉しかった。よくわからないけれど、きっと、先生が好きだったからだと思う。これからもこの人についていける、と思ったのかもしれない。

中学校に進学し、部活第一の生活となった私のピアノに割く時間はぐんと減ってしまった。先生は私がピアノよりも部活を優先したいことをきっとわかっていた、以前ほどの練習量は求めなくなった。それはちょっと寂しかった。ただ、毎年ある発表会で演奏する曲は本気で練習し、成長するにつれ演奏の幅が広がった姿を見せようと毎回思っていた。そして、さらに高校に進むと、平日の練習時間はほぼなくなっていた。でもピアノ教室には通っていた。その頃はもう、レッスン時間の半分はピアノ、半分はおしゃべりという感じになっていた。私はその時間が本当に好きだった。先生は学生時代をピアノに捧げ、ピアノの教師になってからもどうしたらもっと生徒たちのためになるかと勉強をしていた。ある障がいを持つ生徒が入ってきた時は、その障がいについてとことん本を読んだり調べたりして勉強していた。そして、忙しいながらも自分の両親や夫や子供との時間を大切にしていた。どんなことも中途半端にせず、自分が納得するまで向き合う先生を、私は尊敬するようになっていった。はじめは、厳しいなあ、やだなあと思っていたが、自分で働くようになった今では、どんなに忙しくても、あんなにぶれずに、妥協せずにいた彼女は本当につよかったんだとしみじみ思う。

私は、これからも先生にもらった言葉を大切にしてお過ごししていきたい。自分が大切にしている人も、時間も、夢も、もっともっと大切に持ち続けていきたい。

自分と向き合う時間

自分にとっての余暇とは何か、心に残った余暇経験—全く思い浮かばない。私は、こんなにも無味の人間なのか。そうだ、旅である。なぜ旅なのか、私が臆病な故ではないか。いつからこんなに臆病になったのだろうか。ちょっと前までは、何も怖いものはなかった。おそらく高校2年生の時くらいからだろうか。1年生の時、全くといっていいほど勉強しなかった私は、最高の友人に恵まれ楽しい高校生活を送っていた。ところが高校2年生、クラス替えで環境は一変し、クラス内でつぶし合いが起きる日々。その中で生き残るためには、つぶしリストに乗らないような存在、まじめキャラになること。よし、勉強しよう、受験もあるし。そんな気持ちで勉強に向き合うようになった。もともと、勉強は好きだった。小学校のテストはほぼ満点。しかし中学校で部活と人間関係との両立で失敗。そして高2、どんどん勉強にのめり込む。朝7時には登校し授業前の勉強、放課後は夜9時まで。自分の知らない新しい世界が開けるような感覚。努力に応じた結果は私を裏切ることはなく、その結果は私という存在を認めさせる。

この時があったから、私は今ここにいる。そして、今の私がいる。しかし、正直今の自分をコントロールし切れていない。手に入れた自由をもてあまし流されている。自分の正直な気持ちと向き合うことから逃げてきた。目の前のことに全力で取り組めば、自ずと道は開け、自ずと自己を発見できると思っていた。勉強勉強の日々を理由に、それは後回しにされてきた。進路だってそうだった。白地図のままの私は、なんだか迷子になってしまうような気がして地元国立への進学を決めた。何事も自分が歩いた道を失うのがなんとなく怖くなって、頭を使って考えることが増えた。

自分と向き合う時間—それが私にとっての旅である。私は誰も知らない土地や、大都市の雑踏が好きだ。自分の知らない世界を開拓している高揚感。そして誰も自分を知らない地でようやく私は私になれるような気がする。海も好きだ。月並みな表現ではあるが、遠く彼方まで続く広い大きな存在は、自分のちっぽけさを際立たせる。そして、それは私の上へのしかかる何もかもを解き放つ。東京—そこはなんともいえないエネルギーを私に与えてくれる。無機質なようで、傘かしげを生んだ人間味もそなえる。みんながそれぞれの行き先へ向かってせせせと歩んでいる。その雑踏の中で足を止めて上を見上げる。ああ、私はいったいどこへ向かっているのだろうか—と。今年の春休み、初めて大阪のまちを訪れた。その地に降り立ったとたん、今までに感じたことのない空気を感じた。私はいつも旅行の前、殊更初めての地を訪れるとき、そこが舞台の本やら映画をみることにしている。そのほうがずっと面白い。その中で今回最も印象的だった小説は、大沢在昌著の「走らなあかん、夜明けまで」だ。もう自分が生まれる以前の作品であったのだが、その世界観は健在だった。賑やかなのにどこかノスタルジックで、懐かしい。アペノハルカスといった近代的な高層ビルも目立つ一方、電車にせよ町並みにせよ、タイムスリップしたような感覚。昭和レトロ（昭和を知らない私が言えたことではないが）、それこそ“自分”という人間がまだ存在しない時代に一。

人生はよく旅に例えられる。今年の夏は、一人旅に出ようと思う。行き先も全て心の赴くままに決める。自分の気持ちに正面から向き合い、己の気持ちを信じる。そんな旅になればいい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの前半8本!!

「人見知り捨て、スケッチブック持ち、暇潰し」

マックでお昼を食べている家族連れが、不審な表情を浮かべてこちらを見つめている。僕はそんな視線を振り払いながら、勇気をだして持っているスケッチブックをできるだけ高く、大きく振る。そして、自分のできる最高の笑顔を僕の目の前をビュンビュン走る車に向かって投げかけながら心の中で大きく叫んだ「早く誰か止まって!!」。これが僕の初めてのヒッチハイクの始まりである。

二年生の春休みのある日、暇で暇でしょうがなかった僕が、選んだ暇潰しはヒッチハイクだった。目標は、東京から京都を目指し、京都から長野の実家に帰ること。そして僕は大きなバックパックを背負って、いかにも旅人オーラを出しながら東京の交差点近くのマックの前でヒッチハイク第一号車となる車を「静岡・愛知方面」と書いてあるスケッチブックを掲げながら待った。周りからの視線に耐え切れずスケッチブックを下ろそうとした瞬間、一台の車が僕を少し通り過ぎた後止まって、優しくクラクションを鳴らした。僕がすぐに駆け寄ると、運転席の男の人が「え、愛知? 乗りな!!」といった。こうして僕は記念すべき第一号車を捕まえることに成功したのである。

彼は、26歳だった。建設会社の営業部で太陽光パネルを売っているらしい。バスケと合気道が大好きで、僕を乗せた理由を聞くと「体育会系ぽかったから」というほどスポーツを愛している方だった。「学生時代にスポーツに打ち込んでおくと体力や精神力がつく、それらの力は社会に出てからはもちろん、一生役に立つよ」と彼は僕に話してくれた。ハンドボール部に入っている僕にとっては、これからのやる気に繋がるような有難い言葉だった。

次の日、僕は大阪を目指した。「大阪方面」と書いたスケッチブックを掲げていると、一台の車が目の前で急ブレーキをかけて止まった。運転席のサングラスをかけたおじさんが「オカネ、ナイノ? ノッテイヨー」と言った。パキスタン人だった。その人は、ある中古車を海外に売る仕事をしている社長で、仕事の途中だったらしく、彼の仕事場にお邪魔することができた。車に興味がある人が見学したら楽しいのだろうなと思いながら彼と仕事場を歩き回っていると、彼は僕にこう言った「something better than nothing ねー!」。この日本語と英語が混ざった文の意味は、何もしないよりは何かしている方が良いということだ。このパキスタン人の社長さんは、若いときに来日すると、とにかく勉強をして、バイトをして、自分の成長のためと思ったことは何でもやっていたという。結果、1つの会社の社長であり、また他の会社の副社長も務めている人物にまで成長なされた。

暇潰しのために行った人生初のヒッチハイクは、東京→愛知→大阪→神戸→京都→長野と合計12人の心優しいドライバーの方達に乗せて頂き、一週間かけて無事に終えることができた。サラリーマン、社長、外国人、家族連れ、おじいさん、おばあさんなど様々な人々に乗せて頂いたが、どの方も快く僕を迎えてくれて、人生の先輩として沢山のことを教えてくれた。今思うと、暇な春休みに行ったヒッチハイクを通して、多くの人に出会って、刺激をもらうことによって人生がより豊かになることが実感でき、一生忘れられない素晴らしい余暇にすることができた。

夕方の居間

自身の余暇について、私の記憶の中に残っているのはせいぜい10年ほど前、私が小学校低学年ほどの少女であった頃からである。したがって本文における「余暇」の定義を、私の記憶する限りの余暇の時間に限るものとする。

私自身の経験してきた余暇のなかで一等眩しく思い出されるのは、「放課後、帰宅してから母が二階に上がってくるまでの数時間」である。漠然とした書き方であるが、そう書くほかに表現がない。私の母は自営で美容室を営んでいる。自宅は一軒家で、一階が店舗、二階がわたしたち家族の住む居住空間である。日中、母は一階の店舗で仕事をし、仕事が終われば二階に上がってくる。そして夕飯をつくり、家族全員でそれを食べる。これは一応ルーティンに過ぎなかったが、我が家の夕方から夜にかけてのたしかな生活スタイルであった。仕事が終わったり仕事の合間に事務仕事や夕飯の下準備などをするとときに母が二階に上がってくることは稀にあったが、少なくとも私が帰宅してからの時間は、仕事が終わる前に母が二階に上がってくることはあまりなかった。

私の言う「帰宅してから母が二階に上がってくるまでの数時間」というのは、私が放課後帰宅し、母が仕事を終えて「今日も疲れたわ」と言いながらふうふうと二階に上がってくるまでの、まさに3、4時間の間である。時刻にするとおおよそ午後3時頃から午後7時頃のことだ。

帰路を終えて玄関を抜け、階段を上るとたどり着くそこはいつでも日だまりの匂いがした。琵琶茶色の木材の家具で統一された黄昏前の居間は、夏は煌々とした密やかな活気を、冬は外の世と隔絶されたような深い静寂をたたえて私を迎えた。サンキャッチの水晶がいつも綺麗だった。あの時間の居間には安寧の神様がいてのだと今でも思う。自分の立てる音や愛犬の呼吸、外の自然が立てる音以外は何も聞こえない穏やかなひとりきりの午後を、私は色々なことをして大切に過ごした。小説を読んだり、宿題をしたり、習っていたピアノの練習をしたり、愛犬を撫でたり、テレビを見たり、絵を描いたり、時々友達と遊んだりもした。たまにする夕食づくりや、洗濯や風呂掃除も楽しくて、そのうえ母に褒めてもらえるので好きだった。その中でも、居間のソファで本を読み、その片手間で膝の上に眠る愛犬を撫でながらお菓子を食べるのが特に好きな過ごし方だった。その頃の私は平日の午後を謳歌するのに必死で、太陽が色づき段々と沈んでゆく光景が、いつも心に沁みだ。

それはまさに純粋な「余暇」そのものであったと思う。穏やかで、静かで、しかし決して孤独ではない自由な時間。思い返せば、茫洋としていながら何にも代え難い、かけがえのない時間であった。

斜陽の差す柔らかなソファに座って愛犬を撫でたり小説を読んだりするような、そんな地味で慎ましく、しかし確かな穏やかさをもって自分の世界を覆う数時間を、私は愛していた。劇的なことは何ひとつ起こらなくとも、その時間は私にとって聖域のようなもので、紛れもなく人としての私自身を形成したものの一部であった。静かでとりとめのない日々に、それはたしかに水を与えていたのである。潔白で美しい、満たされた日々だった。

他をすべて影にするほど眩しく光るひとつの事柄ではないが、散り散りに、静謐さを持って朧な光を放つ幾多の取るに足らない余暇がいつでも私のこころを暖める。私にとって心に残る余暇とは、どんなに月日が経っても褪せない余暇というのは、一日のうち数時間の、ささやかな自由時間なのだ。

姉との差し飲み

大学に入学してから毎年ゴールデンウィークのいずれか一日に、私は姉と二人で差し飲みをする。私の誕生日が4月の終わりなので、それを祝うついでにお互いの近況を話しながら東京のどこかの飲み屋に行くことがここ3年続いているが、元々姉はそういったことをするような性格ではない。実際に私が実家にいた頃は誕生日をわざわざ祝ってもらったような記憶はほとんどない。大学進学を機に地元を離れてから、この年に一回の習慣のようなものが始まった。ではなぜこのような習慣が始まったのか。私の憶えている範囲で姉のことを思い出しながら、彼女とのささやかな飲み会を心に残った余暇経験として述べてい。

身内の私が言うのも何だが、姉の生き方は中々ユニークなものに感じる。私の姉は性転換者であり21歳を過ぎるまでは男性として生きていた。

私が高校2年生の頃に、「兄」は大学の夏休みを利用してタイへ行き、性転換手術（性別適合手術）を受けて「姉」となって帰ってきた。とはいっても当時の私はあまり衝撃を受けず「そうなんだ」くらいにしか思っていなかった。家族も同様であったように思う。なぜなら姉には幼いころからそういった傾向が見られたからだ。小さいころからままごとやお人形遊びを好み、戦隊モノよりも女兒向けアニメを視聴し、男友達よりも女友達のほうが多かった。中学時代はバレンタインデーになると沢山のチョコをもらっていたが、今にして思えばあれは友チョコだったのかもしれない。中学、高校までは男子の制服を着ていたが、大学入学後は女性モノの服に袖を通し化粧もばっちり通学していた。見た目に関して、元々中世的な顔立ちであったし体つきも華奢なものであった。また大学入学を機に女性ホルモンの投薬治療も受けていたのでより女性的な外見に変化していった。幸い多くの友人にも恵まれいじめ等に遭うことも無かった姉は、小学校から大学に至るまでの学校生活を満喫していた。在学中に女性になった姉は、戸籍上でも「長女」になりそれに伴って私も三男から次男になった。その後姉はカナダへ留学に行き現在は外国で仕事をしている。

弟の私から見ても姉は人生を楽しんでいるように見えるが、何も良かったことだけではない。特に思春期はひどかった。週に2、3回は親と激しく言い争ったり取っ組み合いの喧嘩をしたりと散々だった。私たち兄弟にもすぐに手をあげたので当時の私は姉が嫌いだったし怖かった。だが今にして思えば自身の性と身体の不一致に関する悩みや葛藤があったのだと思う。姉が母に対して「こんな体に産みやがって」と言ったことを私は鮮明に覚えている。

とは言え、時間がたつにつれ姉も落ち着き、現在は家族との関係性も良好である。姉が帰省した際は、母と妹と3人でガールズトークに花を咲かせている。私自身も遅まきながら彼女と向き合えるようになった。今では、上述したように二人で飲みに行くようになった。ここまで長い時間を要したが、世間一般で言うところの「仲の良い姉弟」にようやくなれたと思う。

最後になったが、芯が強く自分を貫いて生きている姉のことを私は誇りに思っている。姉とお酒を飲みながら語り合う時間は、私にとってかけがえのない姉弟の時間である。

世界に一着だけの宝物

古着、と言ったら、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。使い古された価格が安い洋服を想像するだろうか。少なくとも、大抵の人々が古着と聞いて魅力を感じることはないだろう。しかしながらいまや古着は、現代の若者たちのファッションに大きな影響を与えている。私は、大好きな古着について多くの人に知ってもらいたい。

私が古着に夢中になり始めたのは高校生の時であり、そのきっかけとなったのは読者モデルから成り立つファッション雑『mer』である。高校生の時は、生徒全員が制服を着用し、同じような髪形で同じように過ごしていた。高校生の時は何かが特別にできるというわけでもなく、とても地味で平凡であった。今でもそれは変わらないが、ただ、唯一私が誰にも負けないのではないかと、思えることがある。それは、洋服が大好き、ということだ。その中でも古着が好き。古着は、使い古しの安い洋服だけが当てはまるわけではない。私が好きなのは、古着屋のバイヤー一人一人が買い付ける 1960~80年代のアメリカ人やヨーロッパ人が着用していた一点物の洋服を指す。つまり、私が愛する古着というものは、「時代を超えて存在する、世界に一つだけの宝物」なのである。

古着屋は東京に多くあり、月に一回は必ず電車で買い物をしに向かう。Instagram や Twitter で入荷した商品が掲載されると、今すぐにも東京へ飛んでいきたいという気持ちでいっぱいになる。朝起きるとまず最初に思うことは「今日はどんな洋服を着てみんなに会おう」。だれも私の洋服に興味があるわけではないのはもちろんである。ただ、朝起きるときに今日一日を過ごす一着のことを考えるだけで幸せな気持ちになれるのだ。

古着は時代を超えて存在する世界に一つだけの宝物、というように述べたが、大げさに聞こえるかもしれない。しかしこの表現を言い過ぎだとは思わない。今から何十年も前に他国の女性または男性が着ていた洋服が自分の手元にあると思うと私はいつも感動してしまう。「この素敵な服をどんな女の子が着ていたのだろうか」や「このシミは何をこぼしたんだろう」など、一着に対して想像すると楽しくて仕方がない。当時着ていた本人たちは、まさか異国で何世代にもわたって大事にされるなんて予想もしていなかっただろう。古着を着ると、私は当時着ていた人のみえない思い出も着ているような気持になる。また、ボタン一つ一つにも、沢山の手直しがあってこのボタンになったのかもしれない、というようにこの一着を大事に受け継いできた人のことも想像できてしまうのだ。このように、洋服の糸からボタン、縫い目、シミ、すべてを愛らしく思うことができる。それが私にとっての古着の最大の魅力なのである。

私は洋服やアクセサリなど今持っているものを大事にしたい。それは、当時身につけていた人や管理してきた人の気持ちを守っていききたいから、だけではなく、私がなくなった後にも次なる時代の人に大事に守ってほしいからである。私がおばあちゃんになったら、孫にも自分が使っていた何かをプレゼントしたい。その時、古くさいと思うかもしれない。しかしながら大人になって、私の思い出の何かを大事にしてくれるような人に育ててほしい。私はこれからも古着とそれに込められた思いを着て、一日を過ごしていきたい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの前半8本!!

一緒に楽しむゴリパラ見聞録

「もうまじで43歳だけん本当もう間に合わんっちゃないかなって、で、最近何に間に合わないのかもわかんなくなっちゃった・・・」

私の余暇活動はゴリパラ見聞録を見ることである。ゴリパラ見聞録とはごりけんとパラシュート部隊（斎藤と矢野の二人組の芸人）という芸人が人間の素の部分さらけ出しながら、視聴者の希望した風景を視聴者の代わりに写真に収めるという番組である。福岡のローカル番組であるが、人気に火が付き現在は18局で放送している。残念ながら栃木県での放送はないが、CSでも放送しているため、私はCSのフジテレビONEで見ている。上のカッコ内の言葉はごりけんが芸人としての方向性に迷っているときに番組上で発した言葉である。人生の憤り、達観した感情、静かな焦りという人生半ばにして感じていることをなにも飾らず表していると思う。ゴリパラ見聞録はこのような人間らしい部分を隠すことなくそのまま放送するので病みつきになってしまう。例えばパラシュート部隊の斎藤は自分自身のことをブサイクとっており、以下のような発言をしている。「ブサイクの国を作って王様になりたい 俺は。ブサイクは大臣クラス。男前なんてもう石運ぶ仕事しかさせないね。」なかなか過激な発言だが私も自分自身をブサイクとっており、正直イケメンに対して屈折した感情を抱いている。斎藤のこの発言はなかなかブサイクの意見を代表してくれている気がして一人で思いっきり笑ってしまった。こういった、普段誰しもが思っているも口には出さない、場合によっては口には出せないことを見て、ひそかに共感するというのがたまらないのである。

ゴリパラ見聞録のもう一つの魅力は一献である。旅番組であるので全国各地に旅をしながらその土地土地の銘産物や刺身を味わうのだが、特に刺身に関しては毎回豪華な刺し盛りをおいしそうに食べている。ゴリパラ見聞録の名言の一つに“*No sashimi no life*”という言葉があるぐらいである。ゴリパラ一行がおいしそうに刺身を食べているのを見ながら、スーパーで自分で買った刺身を一緒に食べているとより一層おいしく感じられる。それまで人生のこと、子育ての事、芸能界のこと、パチンコのことなどであたまを抱えて苦しんでいても刺身が出てきた瞬間に笑顔になる一行を見ると、私も、悩んでいたことなどをその瞬間は忘れることができる。忙しい日常の中でゴリパラ見聞録の30分がいいリフレッシュの時間となっているのである。

普段テレビをみても自分とは違う世界の出来事のように感じられ、ただ画面の中で行われていることをぼーっと見ているだけである。そこに自分の感情がこれといってあるわけではない。しかしゴリパラ見聞録を見ているときは、様々な感情になる。それは苦悩の共感だったり、イケメンなどへのルサンチマンであったり、独特の空気感からくる面白さであったり、もちろん全国の素晴らしい風景に感銘を受けることもある。普段の生活では忙しくて忘れていた素直な気持ちをもって、一緒に楽しむ。そういうことができるこの番組が私の今の生活には欠かせないものとなっているのである。

父との魚釣り

私が最も心に残っている余暇経験は、幼いころ何度も行った父との魚釣りである。父の趣味が魚釣りであったため、よく弟と一緒に海や川に連れてってもらい、父に教わりながら魚釣りをした。海では小さなハゼをよく釣っていたのを覚えている。また、わたしが小学一年生だったとき、釣り堀にも連れてってもらい大きなタイを釣ったこともあった。釣った日の夜は、近所の家族とそのタイをお刺身にして食べた。その時のわたしの満足気な顔が、写真として家のアルバムに残っており、その表情からもいかに私が魚釣りが大好きだったのかがわかった。川では、ボラやアユを釣った。釣れない日もたくさんあったが、わたしは父と共に行く魚釣りがとても楽しく、大好きな時間であった。なぜこの余暇経験が私にとって思い出深いものであるかについては、ふたつの理由がある。

一つ目は、魚釣り自体がわたしにとってとてつもなく楽しい経験であったからである。特に、魚が餌に食いついたときに竿がブルブルとなるあの感覚が大好きでたまらなかった。また、魚が食いついたと思ってワクワクしながら糸を引くと、食いついたのではなく水中で糸が引っかかっているだけだった時のなんとも言えない虚しさも、忘れられない感覚である。竿を投げるのも、糸をまくのも、魚を針から外すことも父から教わって自分ひとりでできるようになったが、幼かった私にとってどうしても、餌である虫を針につけることができなかった。父はよく青イソメというミミズのような餌を買っていたが、その虫がどうしても気持ち悪くて触れなかった。これら全部含めて、わたしは魚釣りが大好きであり、中学生に上がったころから部活動などで忙しくなり、今ではまったく釣りに行けなくなってしまったことが非常に寂しく感じる。

二つ目の理由は、魚釣りが父と楽しく過ごす唯一の時間であったからである。わたしが小学一年生のときまで、父の仕事上岐阜県のアパートに家族四人で暮らしていた。その時は、月に二回くらいのペースで週末に釣りに連れてってもらった。しかし、私が小学二年生に上がるとき、茨城県に引っ越すと同時に父の単身赴任が始まった。父は週末しか帰ってこないが、わたしも弟も野球クラブを始めたため、週末は練習に明け暮れ、父と出掛ける時間はほとんどなくなってしまった。また、父と母の仲も良いとは言えず、さらに父は寡黙なひとだったため、気づけば父との距離はどんどん広がってしまった。あっという間に高校生、そして大学生になり、父と関わる時間はほとんどなく、話す機会すらなくなってしまった。決して父が嫌いなのではないのかもしれないが、父との間にできてしまった大きな距離は、なかなか埋められずにいる。しかし、幼いころたくさんの場所へ連れてってもらいあんなにも楽しい魚釣りを経験させてくれたことにはとても感謝しているし、今でもその思い出はわたしの心にずっと残っている。

できることなら、またいつか父と一緒に魚釣りに出かけたい。ただ会うのではなく、釣りを通して再会することで、幼い頃の自分に戻った気持ちになって素直に父と接することができるのではないかと思う。父と行った魚釣りの思い出は、わたしと父を、例えそこにどれだけの距離があったとしても、そのつながりを決して途絶えさせないとても大切なものなのである。